



ちい

れん

アットホームな父親

毎年、秋になると犬用の混合ワクチンを打ってもらいに、車で数分の距離にある動物病院へ行くのですが、普段、犬たちを車に乗せることはほとんど無く、車での移動に慣れていない2匹にとっては、この数分間の移動がスペクタクル・アドベンチャーといっても過言ではない、冒険の旅なのでした。いつもは夫が運転してくれるので、興奮してちょろちょろと動き回る2匹を私が抱っこしたり、なだめたりできるのですが、今日夫は、娘を連れてはるばる釧路へ『勝手井』を食べに行くというので、犬たちは私がひとりで病院へ連れて行かなければなりません。夫は、出発の用意をしながら、

「予防接種って、どのくらい時間かかるの？」

と、気にかけてくれて、釧路へ行く前に病院に付き合ってくれるつもりのようなようでした。でも、あまり出たがりではない娘がせっかく、夫と二人でドライブに行く気になっているときに、病院で時間を取られてしまうのは気の毒です。だいいち、待たせている間に娘の気が変わって、「やっぱり、行きたくない。」などと言い出したら、夫ががっかりしてしまいます。この春に中古で買ったばかりで、いつもピカピカに磨いているフェアレディZに、娘を乗せて遠出するのを、楽しみにしているのですから。私は、

「注射の前に検査もあるし、2匹分だからきっと、時間かかるよ。ひとりで大丈夫だから、早く釧路に行きなよ。」

と、言っではみたものの、少し不安でした。家ではおとなしいちいとれんが、車で豹変し、もしも何かあれば、私ひとりでは押さえきれない力で暴れるかもしれないのです。夫は、

「2匹いっぺんにじゃなくて、1匹ずつ連れて行きなさい。危ないから。」

と言い残し、娘と釧路へ出発しました。娘は前日の夜、

「お母さん、ひとりで寂しくない？」

と気にしていましたが、車酔いのため長距離ドライブが苦手で、助手席に座るとたいてい寝てしまう私は、

「ちいとれんがいるんだから、寂しいわけじゃない！せっかく帯広を通るんだから、おじいちゃんちに泊めてもらえば？お父さんも、日帰りで釧路まで行くより、そのほうが運転が楽なんだよ。」

と、二人を送り出しました。夫と娘が泊りがけで出かけるのは初めてのことなので、私はともかく、ちいとれんは寂しいかもしれません。2匹並んでベランダに座り、夫と娘の乗った車を見送っていました。

若いころ夫は、「子育てをする、アットホームな父親像」を自分が演じるのは格好悪い、と思っていたようで、幼い子どもたちを病院へ連れて行くのも、息子の野球の送り迎えも私の仕事で、付き合ってくれたことなど無かったのに、人というのは随分変わるものです。息子がやんちゃな中学生になり、私では手に負えないことが多くなったころから、だんだん父親として頼れる存在になっていきました。当時の私はシステムの設計技師で、この業界の悪癖だと思いますが、納期が迫ると何か月間も残業が続き、家に帰るといつも夜中でした。長時間のパソコン作業のせ

いで、居間の蛍光灯の光やテレビの音が、疲れた目の奥に突き刺さるような、ひどい偏頭痛と吐き気に悩まされ、家に帰っても子どものお話をまともに聞いてやることもできず、横になってばかりいました。自営業の夫は、

「家事もしないで毎晩、ダラダラと会社にいるなよ。もっと早く帰ってこい！」

と、腹を立てながらも、子どもたちの夕食のおかずを何品も作り、食べさせてくれていました。ちいやれんが家族に参加してからも、2匹の夕食は夫が食べさせ、息子や娘のオムツに触れたこともない人が、私の留守中、犬たちのトイレの掃除まで、引き受けてくれたのです。

恐怖の爪切り体験

犬のしつけ本には『犬を車に乗せるときには、クレート（犬を入れる、持ち手のついた箱）に入れるのが安全です。』と書いてありますが、つい2週間ほど前、これを実践して痛い目にあいました。2匹の爪切りをしてもらうため、病院へ連れて行った時のことです。愛犬の爪くらい自分で切ってやりたいと思うのですが、ちいが幼かったとき、息子が家でひとりでちいの爪切りをしてくれて以来、ちいは爪切り道具を見ただけでうなり、私の手に噛み付くようになりました。息子が切った爪からは血も出ておらず、きれいに処理してあったので、

「ひとりでよく切れたねえ。どうやって切ったの？」

とたずねると、

「こうやって、上から押さえつけて切ったんだ。」

というので、爪がどうこうというよりも、力づくで押さえつけられたことが、幼いちいにとっては恐怖体験だったようです。それ以来、夫が、

「ちい、爪切りするよ。」

と声をかけただけで夫の手に噛み付いたこともあり、ちいの前での「爪切り」発言は禁止となりました。動物病院では、獣医の男の先生ではなく、華奢な看護師さんたちがおそらく二人がかりで、やさしく声をかけながら切ってくれるので、ちいは、うなったり、暴れたりしたいのを我慢しているようでした。私の姿が見えていると、ちいが助けを求めて暴れそうなので、待合室で待たせてもらうのですが、どうやって切っているのか見てみたいものです。

れんのほうは、二人がかりならば、だましまし家でも切ってやることはできるのですが、れんの爪を切っていると必ず、ちいが走り寄ってきて、自分の爪が切られているわけではないのに、ものすごい剣幕で怒るのです。れんも、ちいだけを爪切りのために連れて出かけると、自分だけが置いていかれた寂しさに耐えられないようで、外までかすかに聞こえる声で、吠えるというよりも、ひどく寂しそうに叫ぶので最近、2匹を一緒に連れて行くようになりました。夫と二人で行けば、なんということはない爪切りの旅ですが、2週間前、たまたま私がひとりでクレートに入れて連れて行った帰りに、ちいがクレートに入るのを嫌がって暴れ、クレートの入り口に引っかかった私の手の甲は、内出血して青く腫れ上がってしまいました。また、れんのほうは、道中のクレートの中で、かぼそい声で「ひゆるひゆる」とすすり泣きのような声を出しつづけるので、運転しながら私は思わず小声で、

「...か〜わ〜い〜い子牛い〜 売られてゆ〜く〜よお〜」

と、ドナドナの歌を口ずさんでしまいました。車を降りてみると、れんは哀れにもクレートの中に敷いた座布団を、オシッコでぬらしていました。れんは、散歩のときにも、決して外ではオシッコをしない膀胱の大きな男なので、車の中でゆれるクレートの居心地が悪く、よほど怖かったのでしょう。

ちいの予防接種

予防接種の話に戻ります。病院を2匹分予約し、ちいを先に連れて行くことにしたのですが、ちいだけを連れて家を出ると、れんが寂しがって、外まで聞こえる声で叫ぶので、まず、れんをオヤツ（いつものフードを数粒ですが...）でケージの中のクレートに誘い、ケージの扉を閉めたあと、トイレに行くふりをしてカバンも持たず、居間から出ました。居間と玄関の間の古いドアを完全には閉めずにおいたので、ちいは目ざとくそれに気づき、ドアを自分で押して玄関へ出てきました。私は、れんに見られないようにドアをそっと閉め、ちいとふたりで音をたてないように玄関を出ました。れんは、ちいと私が家の外に出たとは思わなかったようで、いつもの悲痛な叫び声は、聞こえませんでした。ベランダの前を通過して駐車場へ行くと、れんに気づかれそうなので、私たちは玄関前の階段を降り、道路側から回って駐車場に入り、そっと車に乗りました。家の中のれんは、ちいと私がなかなか居間に戻ってこないのを不思議に思いながらも、おとなしく待っているようでした。

助手席で、ちいはいつものように窓に向かって立ち上がり、外を見えています。「危ないから、お座りしなさい！」といくら言っても、言うことを聞きません。以前、ちいが窓のスイッチを自分で押してしまい、ウィーンと窓が開いて、運転中の私を慌てさせたことがあるので、窓のスイッチも、ドアもロックしておきました。ちいは、交差点で信号待ちをしているときに、隣に停まった車を運転していたお嬢さんたちから、

「めっちゃ可愛い、見て見て！！」

などと騒がれたことがあり、それに気を良くしたのか、私とふたりで車に乗ると必ず助手席の窓にぴったり顔をくっつけて（というか、顔が平らなのでそうなるのですが）立ち上がり、外を眺めるのでした。私は、車が揺れても、ちいが転げ落ちないように、リード（犬の首輪につける綱）を短めにして、助手席のヘッドレストにくくりつけ、トラックの積荷を倒さないように走るときと同じように、ちいを倒さないように、ゆるやかな運転を心がけました。

病院の診察台で、ちいはいつものように興奮して暴れ、体を支えてくれている看護師さんを、てこずらせていました。予防接種の注射針を刺されたときには「グルルル！」と、うなりましたが、先生にもらったおいしいオヤツについては、しっかりいただいでいました。もし、このオヤツがなかったら、看護師さんの手に、本気で噛み付いていたかもしれませぬ。先生の絶妙なオヤツ・タイミングが、看護師さんの手をちいの牙から救ったといっても、過言ではありません。

診察のときに、ちいの後ろ足の甲が、両方とも赤くなっているのに気づいた先生が、いつから赤くなっているのかと私に尋ねた後で、

「もし良ければ、抗菌シャンプーと、かゆみどめの塗り薬をセットで出させてもらえませんか？足の先だけなら、シャンプーは、少ない量で出すことができますよ。」

というのでお願いしました。先生が、そんなに遠慮がちなものの言い方をするのは、私が市販の抗菌シャンプーをインターネットで大量に買いこんでいることをご存知だからでした。市販のものは抗菌成分が薄く、病院で処方されるシャンプーの4分の1しか入っていないのですが、1ガロン（約3.8リットル）で買えばとても安く、2匹を全身、2度ずつ洗っても、500円ほどで済むのです。インターネットでは、獣医さんが診断後に処方する、皮膚病用のフードも格安に買うことができますが、そのことを先生に話したときには、

「処方用のフードをインターネットで売っているのは、日本だけなんですよね。」

と、ちょっと怒ったように、悲しそうにおっしゃっていました。先生から見ると、モラルのない獣医師が、患犬を診もせず、処方食だけを無責任に売っていることが、ちょっと許せないという、強い口調でした。ひょろりと背が高く、学生さんのような、かわいらしい風貌の先生ですが、病院のパンフレットにかかれた経歴を見ると、日本だけでなく海外でも皮膚病の勉強をしてきた熱心な先生で、皮膚病治療についての確固たる信念があるのだと思います。

この先生が、初めてちいを診察したとき、

「ちいちゃん、ちいちゃん。はい、ちょっとお母さんのほうを向いてね。」

などと、ちいに一生懸命話しかけるので、犬のことをあまり知らなかった私は心の中で、「ちいを産んだのは、私じゃないんだけどなあ。先生ったらおかしな言い方をするなあ。」などと思ったのです。先生の奥さんも、動物看護師として同じ病院で働いており、ちいが幼かった頃、いつも背中に赤ちゃんをおんぶしていました。ある日ちいが、奥さんの背中からぶらさがっていた赤ちゃんの手の先を、べろべろとなめてしまったことがあり、私はあわてて謝ったのですが、奥さんは朗らかに、

「大丈夫ですよー。」

と笑って、赤ちゃんの手を拭くことさえしませんでした。犬のしつけ本をたくさん買い込んで、頭でっかちになっていた私は内心、「犬の口の中の菌は、人間にとっては有害らしいけど…。逆の立場だったら、きっと私は自分の赤ん坊の手をすぐに洗ってしまうな。」と思いながらも、この人は本当に犬が好きなんだなあ、心が温かくなりました。

その後、ちいやれんと暮らすうちに、あのとき先生が、ちいに話しかけたり、看護師の奥さんが、大事な赤ちゃんの手を、ちいの前では拭かなかった理由が、なんとなくわかるようになりました。犬は、私が想像していた以上に、飼い主の言葉をたくさん理解するだけでなく、感情も豊かですね。れんに、「ボールは？」と聞けば、一生懸命自分のボールを探して持ってきますし、ちいは、れんが居間の床の上で粗相をしたときには、台所にいる私のところに走ってきて、す

ごい剣幕で怒りながら私を呼びます。相棒の粗相くらいで、そんなに怒らなくても...と思いますが、きれい好きのちいには、れんの「だらしなさ」が許せないのかもしれないかもしれません。ちいは、私が後始末をしてトイレに流しに行くところまで、きちんと見届けないといけないようで、いつもトイレの前までついてきて、私の仕事ぶりをチェックしてから居間に戻ります。

れんの予防接種

ちいの予防接種が終わり家に帰ると、れんが吠えもせず、おとなしく待っていました。れんは、「お母さん、随分トイレが長かったね。ちい姉ちゃんは、玄関で遊んでたのかなあ？」くらいに思ってくれていたに違いありません。テレビ番組の、「犬のしつけ選手権」で優勝していた森田誠さんという人が、「私の犬は、『待て』と言えば軽く3時間は、じっと待ちますよ。」と言っており、信じられなかったのですが、れんも30分くらいなら静かに待てるようになったのかもかもしれません。森田さんの犬は立派なもので、指示された場所に「フセ」をしたまま3時間（...ちょっと気の毒？）で、れんの場合は、自分のケージの中をウロウロしながらの30分ですが...

次は、れんの予防接種の旅ですが、車の助手席に乗せた途端、後ろ脚をぶるぶる震えさせ、極度の緊張状態になっていました。まだエンジンもかけていないというのに、びびりすぎです。れんの背中をゆっくりと撫で、体の震えが止まったのを確認すると、れんは運転席と助手席の間の溝に降り、ぴったりと「フセ」をしたので、これは安全だと思い、そのまま病院へ向いました。れんは、クレートに入れられたときのように「ひゅるひゅる」と泣くこともせず、おとなしくしていました。ところが、病院に着き、れんが立ち上がると、れんが伏せていたマットが、ものすごくしっとりして臭うのです。タオルを敷いてやらなかったことを後悔しました。注射のほうは、おとなしくされるがままになっていましたが、せっかくいただいたおいしそうなオヤツには目もくれず、会計を待つ間に、他の犬の飼い主さんと目が合うと、なぜかきちんとお座りをしてみせて、ほめられていました。帰りの車の中では、まるで「ぬいぐるみ」のように助手席に深くうずくまり、動く床の恐怖に耐えていました。（気の毒すぎ...）

クレートに入っても、入らなくても結局、お漏らしをしてしまう、この小さな男（れん）が、家族でキャンプに行ける日は果たして、やって来るのでしょうか...